

『国家神道と日本人』 島蘭進、岩波新書、2010年

天理大学人間学部准教授

島田 勝巳 Katsumi Shimada

「国家神道とは何か？」と聞かれても、宗教研究者でさえにわかには答えに窮するだろう。一方で、多くの日本人は、「国家神道は終戦直後に解体されたもの」という漠たる認識は持っている。本書は、「国家神道」をめぐるそうしたごく一般的な日本人の通念に根本的な再考を促そうとする野心的な試みである。

そもそも、なぜ「国家神道」の解明が重要なのか。島蘭によればそれは、この問題こそが、現代日本人の宗教的アイデンティティの理解の鍵を握るものだからである。島蘭は、戦後の日本において、「国家神道」の実態が見えにくかったがために、日本人の宗教的アイデンティティの自覚が不確かなままになり、ひいては日本文化論の流行をもたらしたと見る。こうした問題意識から島蘭は、本書において、「国家神道」を軸とした国家と宗教との関係性に焦点を当てながら、近代日本の宗教構造の全体像を明らかにしようとする。

本書は五章から成る。まず第一章では、日本近代史における国家神道の位置について論じられる。島蘭によれば、1889年の大日本帝国憲法公布までに整備された宗教制度のもとでは、「国家ノ宗祀」が「宗教」ではなく「祭祀」として、公の次元のものとしてされる（祭政一致）一方で、諸「宗教」集団は「私」的事柄としてある限りで、自由な活動が認められた（政教分離）。「公」の国家神道と「私」の諸宗教というこうした構図を島蘭は「二重構造的な宗教地形」（51頁）と呼び、近代日本に特殊な宗教状況として捉えている。

第二章では、「国家神道」概念の理解について論じられる。島蘭によれば、「国家神道」とは、神的起源と系譜を持つ天皇の祭祀（皇室祭祀）を国家統合の中核としながら、全国の神社を伊勢神宮および宮中三殿に鎮座する天照大神を頂点とした神々のヒエラルキーに組織化し、さらには天皇と国民との関係を「万世一系の国体」として捉え、天皇への崇敬とその国体思想に基づく道徳とを育もうとする、一連の信念の体系を指す（58～59頁）。こうした島蘭の「国家神道」理解は、国家管理された神社神道だけを「国家神道」とみる従来の神道学的・歴史学的理解に比べると、かなり広義の理解である。また、そうした狭義の理解は、実はGHQの「神道指令」で用いられたアメリカ的な理解にも近い。だが、島蘭によれば、そうした狭義の理解では、皇室祭祀や国体論の側面が漏れ落ちてしまう。国家神道の全体像を提示するためには、皇室祭祀や国体論が、人々の身体実践や儀礼行動を通して内面化されるプロセス、いわば「観念の身体化」の契機にまで注意を払う必要があるとする。

第三章では、幕末維新时期において、神社神道、皇室祭祀、国体論といった複合的な要素からなる国家神道が、一つの統合的ヴィジョンの下で形成されていく過程が描き出される。島蘭によれば、「万世一系」の天皇の統治は、儀礼的・組織的には、宮中三殿と伊勢神宮という二つの聖所を基盤としてこそ可能になる。さらに、全国の官国弊社の祭祀が皇室祭祀と伊勢神宮の祭祀に一体化し、国家神道の統一的な儀礼体系が形成されていく。一方で、観念的側面としては、「皇道」の理念が、天皇崇敬を核とする統治理念に加え、多様な思想・宗教的立場を包み込む包容的観念として登場し、正統思想としての地位を得ていく。「大教宣布」の戦略が行き詰る中で、この「皇道」の理念は「教育勅語」という形で、近代学校システムの中にその宣揚の活路を

見出し、その徹底化が図られるのである。

第四章では、「教育勅語」以後の国家神道の展開史が描写される。その際に島蘭は、村上重良による国家神道の展開の時代区分を参照しつつ、次のような区分を提案している。それは、まず第一期（1868年－1890年）を国家神道の「形成期」とし、第二期（1890年－1910年）を「確立期」、第三期（1910年－1931年）を「浸透期」、そして第四期（1931年－1945年）を

「ファシズム期」とする区分である。この中でも特に、第二期と第三期の分析に、島蘭の国家神道論の特色が表れている。そのことは、「生活形式の歴史」の叙述（145頁）という島蘭自身の表現に明らかだが、そこで彼が注目するのが、先に評者が「観念の身体化」と呼んだ契機にほかならない。島蘭によれば、1930年代には学校教育と神社とメディアとの連関が国家神道の強力な普及システムとして機能していた。とりわけ学校は、教育勅語、御真影、君が代、唱歌の活用によって、国家神道の言説システムの教化にとっての主要な場となった。また、靖国神社は、それまでの国家神道の言説にはなかった実存的な苦悩に対する癒しや慰めの次元を提供することになった。さまざまな国家的行事を通して、天皇・皇室が直接的・間接的に国民の脳裏に焼きつけられるようになったのもこの時期であった。

第五章では、本書の結論として、国家神道は未だに解体していないとする著者の論点が解説される。島蘭によれば、1945年のアメリカの政教分離の理念を背景とするGHQの「神道指令」では、「神社神道」と国家との特別な関係が禁止される一方で、皇室祭祀については、天皇・皇室が私人として実践するものとして、大幅に保存されることになった。こうした視点から島蘭は、戦後の国家神道が、一方では日常的・季節的儀礼を中心とした皇室祭祀を、他方では神社本庁などの民間団体を担い手とする天皇崇敬運動を軸として、今日に至るまで存続していると見ている。

以上のように、島蘭の国家神道論は、極めて挑戦的かつ抜本的なものと言えよう。特に評者にとっての本書の魅力は、個々の歴史的事実・資料の発掘・紹介にではなく、むしろその多角的な理論的・方法論的関心にある。例えば、本書における「観念の身体化」への着目は、フーコーを淵源とするアサドやフジタニらの表象論や身体化論を下敷きにしている。また、国家神道と日本人論との関係性の議論も、おそらくはW. デーヴィスの議論を受けたものである。本書において島蘭は、こうした多様な理論や方法論を駆使しつつ、近代日本宗教史の歴史記述に新たな一頁を加えることに成功したと言えよう。

最後に、本書を貫く著者の関心の背後に、かつて米国におけるCivil Religionの問題を語ったR. N. ベラーの姿を看取するのはおそらく評者だけではあるまい。ベラーがそうであったように、島蘭自身もまた、この問題にこそ、日本の一宗教学徒としての実存的意味を問いかけているのではないだろうか。

